

■博士論文題名および発表題目

太宰作品の先鋒 ―〈女性語り〉に焦点をあてて―

■本発表の概要

◎博士論文の目次 ……【資料一】参照

◎博士論文の概要

【序論】

○女性語り作品について

- ・対象作品 ……【資料二】参照
- ・女性語り作品の研究価値 ↓〈代表作の多さ〉〈中期作品の多さ〉〈太宰の認識〉

○研究史 その主な論点

- ① 〈女性語り〉が書き連ねられた理由
- ② 〈女性語り〉で追究されたもの
- ③ 太宰は女性を描いたのか

▼先行研究では、全ての問いの出発点である〈女性〉がおさなりにされている。  
作品読解を通して、太宰が〈女性語り〉で描いた女性を明らかにする必要がある。

【本論】

○要約 ……【資料三】参照

【結論】

○〈モチーフ〉 ……【資料三】参照

- ・〈家族〉〈恋愛〉〈夫婦〉〈子育て〉をモチーフとしている
- ・語り手はみな、困難な状況を受け入れ、変わろうとする女性であった

▼太宰が〈女性語り〉で描いた女性は、〈自立〉に向けて成長を果たしていく女性である。

○〈語り〉 ……【資料三】参照

- ・自らの気持ちをそのつど語ることに特徴が認められる ↓ 〈伴走説〉
- ・伴走説の効果

臨場感ある語りを保証し、読者の感情移入を容易にする。さらに、

▼そのつど気持ちを語ることで、悩み、成長していく語り手の姿が描写されている。

○まとめ 二十世紀的視点で太宰を読もう

▼〈太宰が女性語りで描いた女性〉は、〈自立〉の壁に当たりながら、困難から逃げるこ  
なく、自ら考え、道を見定めようとした女性であった。その過程で語り手の女性は、〈成長〉

を果たしていく。

▼二十世紀は〈女性の時代〉である。いまこそ、パラダイム転換をはからねばならない。

▼〈自立〉していく女性を、まぶしく見つめることのできる太宰の感性は、結果的に半世紀  
先の世の中に通用した。〈女性語り〉は二十世紀の今こそ、まぎれもなく太宰作品の先鋒  
として輝きを増している。

◎今後の課題

- ・「ヴィヨンの妻」「斜陽」を修正後、発表する
- ・主張を先鋭化させるべく、博士論文を修正する
- ・伴走説の可能性を追究する(太宰の男性語り作品、他作家を視野に入れて)

【資料一】「太宰治の先鋒 ―〈女性語り〉に焦点をあてて―」目次

序論

太宰治の先鋒 ―〈女性語り〉に焦点をあてて―

本論

[一] 〈女性語り〉以前

「魚服記」――逃れられなかったスワ―

[二] 〈女性語り〉へのアプローチ

I 家族と恋愛

1、「燈籠」――さき子・振り返りのモノローグ――

2、「葉桜と魔笛」――「老夫人」の宿痾――

II 夫婦

3、「皮膚と心」――〈自己変革〉を果たす「私」――

4、「きりぎりす」――「背骨にしま」われた〈かつての自分〉――

III 子育て

5、「ヴィヨンの妻」――〈坊や〉にとっての聖母――

6、「斜陽」――かず子・斜陽から「太陽」へ――

7、「おさん」――〈自己完結〉する妻と夫――

結論

〈女性語り〉とは――二十一世紀視点で太宰治を読む――

あとがき

初出一覧

【資料二】 太宰治 〈女性語り〉一覧表

	著作名	区分	太宰の年齢	発行年月日	掲載誌紙・書	初取刊本	
1	燈籠	前期	29	1937(S12)/10/1	若草	女性	
2	女生徒	中期	31	1939(S14)/4/1	文学界	女生徒	
3	葉桜と魔笛			1939(S14)/6/1	若草	皮膚と心	
4	皮膚と心			1939(S14)/11/1	文学界	皮膚と心	
5	誰も知らぬ		32	1940(S15)/4/1	若草	女の決闘	
6	きりぎりす	後期	33	1940(S15)/11/1	新潮	東京八景	
7	千代女			1941(S16)/6/1	改造	千代女	
8	恥			34	1942(S17)/1/1	婦人画報	女性
9	十二月八日				1942(S17)/2/1	婦人公論	女性
10	待つ	1942(S17)/6/30	女性				
11	雪の夜の話し	36	1944(S19)/5/1	少女の友	薄明		
12	貨幣	後期	38	1946(S21)/2/1	婦人朝日	ろまん燈籠	
13	ヴィヨンの妻			39	1947(S22)/3/1	展望	ヴィヨンの妻
14	斜陽				1947(S22)/7/1・8/1・9/1・10/1	新潮	斜陽
15	おさん			1947(S22)/10/1	改造	桜桃	
16	響応夫人			40	1948(S23)/1/1	光	桜桃

【参考文献】16作の選定……東郷克美『太宰治という物語』(2001年3月30日、筑摩書房)の「女性独白体の発見」

書誌……『太宰治全集別巻』(1992年4月24日、筑摩書房)の「著作年表」

【資料三】「太宰作品の先鋒 — 〈女性語り〉に焦点をあてて—」本論 要約表

		語り手について	先行研究への疑問点	モチーフ	語り	発表初出誌
[一] 〈女性語り〉以前	魚服記 ——逃れられなかったスワ——		スワが滝壺に向かったラストの読み（「魚服記」最大の論点）	ラストはスワが都を志向した表れ 永遠に父にさいなまれる少女		「日本語日本文学論叢 第七号」（武庫川女子大学大学院文学研究科、2012年3月5日）
[二] 〈女性語り〉へのアプローチ	燈籠 ——さき子・振り返りのモノローグ——	「二十四」歳 「まずしい下駄屋」の一人娘・さき子が語る	両親に対するさき子の不満が無視されている点	両親への不満→両親と自身の半生を受け入れる		「阪神近代文学研究 第一四号」（阪神近代文学会、2013年5月31日）
I 家族と恋愛	葉桜と魔笛 ——「老夫人」の宿痾——	「老夫人」が「二十」歳の頃の「私」を回想して語る	ロマンチズムに基づいて語られすぎている点	妹の死にまつわる疑惑→受け入れようと努力する		「武庫川国文 第七八号」（武庫川女子大学国文学会、2014年11月1日）
II 夫婦	皮膚と心 ——〈自己変革〉を果たす「私」——	「二十八」歳で新婚の「私」が語る	「私」が自身の問題を掘り下げている点が無視されていること	夫婦の不和→自分の自信の無さを恥じ、夫の愛を受け入れる	語りに共通の区切りが確認できる	博論提出時書き下ろし 「武庫川国文 第八十号」（武庫川女子大学国文学会、2016年3月発行） 掲載予定
	きりぎりす ——「背骨にしまわれた〈かつての自分〉——	「二十四」歳の妻である「私」が、画家である夫との結婚生活を語る	妻の語り、夫を通して解釈されている点	離婚→〈夫との別れの物語〉を編んで〈成長〉しようとした	語りの内容が四つに区切れ、区切りごとに妻が気持ちを吐露している	日本近代文学会関西支部二〇一五年度春季大会（2015年6月6日、於・武庫川女子大学）にて口頭発表 「武庫川国文 第七九号」（武庫川女子大学国文学会、2015年11月30日）
III 子育て	ヴィヨンの妻 ——〈坊や〉にとっての聖母——	「二十六」歳の「私」が語る	夫と妻の関係のみで論じられている点	夫の無関心・障害を持つ子の子育て・貧窮→社会参画によって〈自立〉を果たし、子供を育て上げる覚悟ができた		書き下ろし
	斜陽 ——かず子・斜陽から「太陽」へ——	「二十九」歳のかず子が語る	〈かず子の弱さ〉が軽視されている点	時代の変化・家計の逼迫・家族の変化・女性としての生→「斜陽」の環境を自ら「太陽」にしようとする、〈自立〉を果たした	困難な現状を認知し、「道徳革命」の道を決意するまでの心境が、そのつど語られている	書き下ろし
	おさん ——〈自己完結〉する妻と夫——	夫の浮気に悩む妻の話	妻と夫を両極端な人物として捉えている点	夫婦の不和→プライドを捨て、夫を見限り、子供のために〈自立〉を決意する	日時をもとに、五つの区切りを見出し、空白の時間をつきとめた	「かほよとり 第一五号」（武庫川女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻院生研究会、2015年3月20日）